

つの機能を学習し、森林が土砂の流出や山崩れを防ぐ様子を模型を使って実験しました。

「森林がある山」は、木や落ち葉が土壌を雨から守り、土砂や家の模型が流れ落とされることはほとんどありませんでしたが、「森林のない山」では、見る見るうちに土壌が流され、家の模型もあつという間に転げ落ちました。

家の模型が流されるたび、子どもたちからざわめきが起こり、土がはがれて底板が見えるまでになった。「森林のない山」の模型と、ほとんど変化のない「森林のある山」の模型を見比べて、森林の持つ山崩れを防ぐ機能に感心しきっていました。

今回も森林の働きの重要

性について、楽しみながら十分に理解してもらおうことができ一安心でした。



「森林のはたらき」

ボランティアとニホンジカ食害対策を実施

〈徳島森林管理署〉

一〇月一四日、高知県境の白髪避難小屋付近の国有林(三嶺国有林三二イ及び三二イ林小班)で、「三嶺

の自然を守る会」(暮石理事長)が募集したボランティア二二名の協力をいただき、ニホンジカの食害を防ぐための樹木ガードを設置しました。

高知県側では高知中部森林管理署と「三嶺の森をまもるみんなの会」(依光代表)が連携して、広範囲で植生回復ボランティア活動を実施しましたが、この日は、徳島県側でも企画したもので、当署からも四名がサポートスタッフとして参加しました。

当日は、三嶺林道の終点を九時半に出発し、一端四ツ小屋谷に下って徒歩し、ニホンジカ食害で下層植生が失われ登山道が判然としない尾根を、約二時間歩いて白髪避難小屋まで直登しました。

昼食後、参加者は三名ずつの八グループに分かれて、樹木ガードの設置作業を行いました。この付近は、ニホンジカ被害が顕著なウラジロモミは先行して保護されているため、この日はダケカンバなど広葉樹を主体に保護を行いました。

尾根に、クマザサやススキの植生が戻りつつあることは、これまでの地道な取り組みの成果ではないかと考えられます。しかし、尾根の両側の林縁部はモミなどの白骨林となっており、今後も継続的にニホンジカ対策を講じる必要性があります。

短時間の作業ではありませんでしたが、一一樹種、総計二四六本の樹木に樹木ガードを取り付けることができました。厳しい生育環境下にあるこれらの樹木ですが、今後一〇年以上はニホンジカの食害を免れることができます。

周辺はすっかり秋の気配で、ススキの白い穂が風に揺れていましたが、一時期はクマザサが衰退してニホンジカが食べないバイケイソウやイグサばかりだった

作業場所からは、高知県側の多数のメンバーが、ニホンジカ除けネット作業など行っているカヤハゲが遠望できましたが、帰りは登り以上に厳しいため、一四時には帰途につきました。山麓でも、かつて繁茂していたスズタケが失われ、モミやリョウブ、ヒメシヤラなどがあちこちで食害を受けており、ニホンジカ被害の深刻さを参加者は改めて認識し

たようでした。

今回の活動について、資材及び作業道具の便宜を図っていただいた高知中部森林管理署に改めて御礼を申し上げます。

当署としては、今後とも、ボランティアなどの理解と協力をいただきながら、こうしたニホンジカ食害対策に積極的に取り組んでいく考えです。



ニホンジカによる食害状況説明

木材利用の「WOODキャラバン」を実施

〈徳島森林管理署〉

一〇月九日、当署も参加して、木材利用促進を要請する「WOODキャラバン」を実施しました。

一〇月の「木づかい推進月間」に合わせて、徳島県も一〇月を「森林・木材利用促進月間」と設定し、イベントの開催や各種の取り組みを行っています。W

OODキャラバン」はこの一環として、広く木材利用を呼びかけるものです。これまででは、主に市町村

の首長に対して要請行動を行ってきましたが、公共建築物木材利用促進法に基づく木材利用方針が、全国に先駆けて全市町村で策定さ

れたことを踏まえ、木材利用の裾野を広げるために、今回初めて大学とフェリー会社を訪れることとしたものです。

まず、一〇時から徳島県庁正面前で県幹部や関係者が出席して出発式が開催され、激励や決意表明が行われ、当署の二名を含む一

名のキャラバン隊は、三台の車に分乗して出発しました。訪れた四国大学と徳島文理大学はいずれも地元の私学で、木材をシンボリックに使っていただき、若い学生たちが木材の良さに触れることができるよう、学長ら幹部に対して要請を行いました。最後に、訪れた

徳島文理大学への要請



が、近々、新しい大型フェリーの建造と乗客ターミナルの新築が予定されているため、木材利用の積極的な検討を要請しました。

キャラバンを終えて、国や県は木材利用について多くの施策を講じていますが、民間セクターにはこうした施策がよく理解されていないのではないかというのが率直な感想ですが、「森

林・林業再生プラン」の展開によって川上から国産材

が出てくる体制が整いつつある中で、木材利用促進を図ることは極めて重要です。当署としても、森林土木事業などで自ら木材を利用することはもとより、こうした機会を捉えて、木材利用促進の取組に積極的に協力したいと考えています。

森林教室

〈木工クラフト〉を実施

〈徳島森林管理署〉

九月一二日、徳島市立川内南小学校で、児童九三名（小学四・五年生）、を対象とした森林教室（木工クラフト）を行いました。

当署では、前期と後期に分け公募により森林教室を

実施してはいますが、今回の森林教室は前期分七回のうちの第六回目で、川内南小学校から「森林と私たちのくらしの結びつきを学習できる森林教室をお願いしたい。」という内容で依頼を受けて実施したものです。

最初に、森林の働きについて説明を行い、DVD「木材を使って地球を救う」により学習を行いました。森林の役割が私たちの生活に

どのように結びついているのか、水や空気をきれいにする働きや、山崩れ・崖崩れを防止する働きなど、森林の大切さについて理解を深めてもらいました。子供達はメモをとりながら真剣に話を聞いていました。

木工クラブでは、「マイ箸」を作りました。材料は徳島県産のスギ間伐材を

使用し、紙やすりで削り、くるみの油を塗って仕上げます。子供達は、木を削った粉で真っ白になりながらも、楽しそうに取り組んでいました。

当署では、森林の公益的機能や木材利用についての理解を深めてもらうため、地域や学校等の要望に応えつつ、今後とも計画的に森林環境教育を実施していきたいと考えています。



森林の働きについて説明

「ウッドライフフェスティバル」に参加

〈香川森林管理事務所〉

一〇月六日、七日の両日、

高松市のサンメッセ香川において、「二〇一二ウッドライフフェスティバル」が開催されました。このイベントは、木材（国産材）の利用推進を目的に、木材関係団体等が各種の催しや即売会を実施するもので、当所も毎年参加しており、今年度で第二五回目を迎えました。

当所では、つるかご編み教室とシイタケの菌打ち体験、木工教室を行いました。

つるかご編み教室は、例年盛況であり、今年度も大人を中心に多数の参加者が集まって、様々な形のつるか

かごを完成させていました。

また、シイタケの菌打ち体験では、菌打ち用のドリルでほだ木に穴をあけ、ハンマーで菌の駒を打ち付ける体験を行い、菌を打ち付けたほだ木は参加者にプレゼントしました。

さらに、木工教室では、たくさんの子供たちが輪切りにした細木、ボンド、マジックを使い、ウサギ、犬、コアラといったかわいい動物の置物を作って喜んでいました。

これら教室等とともに、香川の国有林を紹介するパネルも展示し、参加者に対して国有林のPRもできたとおもいます。

今後もこのようなイベントを通じて、森林や国産材の利用について関心

を持ってもらえたらと考えています。



手前が木工教室、後方がつるかご編み教室の様子

